

### 3. 古墳時代—乙金大開発の時代—

#### i) 古墳を造る

古墳時代の終わりごろ（6世紀後半～7世紀）、乙金山の山麓にはたくさんの古墳がつくられました。これらの古墳は、巨大な前方後円墳などではなく、直径10mほどの小規模な円墳で、いくつも集まって造られることから群集墳とも呼ばれています（写真6）。古墳は人工的に土を盛り上げた墳丘（写真7）の内部に、石で造った部屋である横穴式石室（写真8）を備えています。石室は1つ数百キロもある大きな石を丁寧に組み上げており、機械がない時代によくこんな構造物をつくったなど、古代人の知恵や技術の高さに驚かされます。横穴式石室は遺体を納める部屋（玄室）と、玄室への通路（羨道）で構成されます（写真8）。羨道を通じて出入りでき、何度も遺体を埋葬できるつくりになっていることから集団（家族）用の墓ともいえるでしょう。古墳を造るには、①山の斜面を削って平坦面をつくる。②石を積み石室を組み上げながら、石室の周囲に土を盛り、墳丘をつくる。③天井の石を置き、さらに土を盛り、という多くの労働力と高度な土木技術が必要でした。乙金山山麓には約100基ほどの古墳があった推測され、この時代に大規模な開発があったことを物語り



写真6 山裾にいくつも造られた古墳



写真7 乙金宝満宮の裏で発見された古墳



写真8 真上からみた古墳



写真9 正面からみた古墳

ます。これまでに調査した古墳のほとんどは、盗掘にあたり石を抜き取られたりしているため、大きく破壊された状態で発見されていますが、石室の中からは土器のほか、金メッキの耳飾や勾玉・ガラス玉などのアクセサリー、鉄鏃などの武器が発見されています。

## ii) 集落跡の発見と人々の暮らし

では、このような古墳をつくった人たちはどのような暮らしをしていたのでしょうか。次にムラの様子について見ていきたいと思います。

緩やかな丘陵<sup>ゆるかな丘陵</sup>の上にある薬師の森遺跡<sup>たてあなじゆうきよあと</sup>では5次調査地を中心にたくさんの<sup>たてあなじゆうきよあと</sup>堅穴住居跡が発見されており（写真10）、現在までに80軒ほどを確認しています。ほとんどが6世紀後半～7世紀初め頃のもので、比較的短期間に集中して人々が生活を営んだのでしょう。堅穴住居は1辺5mほどの大ききで、4本の柱で屋根を支えるつくりをしており、炊事場であるカマドを備えています（写真11）。住居の中からは土器などがそのまま残されていることもあり（写真12）、当時の人々の生活を垣間見ることが出来ます。

出土した遺物を詳しく調べてみることによって、ムラの中の様子が少しずつ明らかになってきました。例えば、焼き損ねた失敗品の須恵器<sup>すゑき</sup>や須恵器をつくる際に生じる焼き物の破片<sup>しやうこ</sup>が出土していることから、近くに須恵器をつくる工房<sup>こうぼう</sup>があったと推測できます。また「鉄滓<sup>てつさい</sup>」といわれる鉄の道具をつくる際の廃棄物<sup>はいきぶつ</sup>が多数出土していることから、ムラの中で鉄器<sup>てつぎ</sup>



写真10 古墳時代のムラの跡



写真11 発掘された竪穴住居



写真12 竪穴住居の中に残されていた土器

づくりをしていたのかもしれませんが。このようにモノづくりに関わる遺物が出土していることから、ムラの中に職人がいた可能性が大きいといえるでしょう。さらに興味深いものとして、朝鮮半島ちょうせんはんとうに系譜をもつ遺物が出土しており、注目できます。このムラの人々は須恵器づくりや鉄器づくりを仕事のひとつとし、さらには海を越えた朝鮮半島の人とも交流をしていたのでしょ

ところが、6世紀後半～7世紀初頭にたくさんあった住居は7世紀中頃～後半にはほとんどなくなり、集落は次第に姿を消していきます。

#### 4. 奈良・平安時代 ー小さな村と役人の姿ー

都が平城京（710年～）、さらに平安京に遷り（794年～）、大宰府が賑わいをみせていた頃、乙金地区の様子はどうだったのでしょうか。奈良時代の遺構としては、竪穴住居や掘立柱建物（写真13）、井戸、須恵器の窯などが発見されています。竪穴住居は、これまでいくつか発見されていますが、古墳時代に比べると遥かに少なく、比較的小規模な集落であったようです。しかしその一方で、一般的な集落からは発見されない転用硯（須恵器の蓋を再利用した硯）や、銅製のベルトのバックルなどが見つかっており、大変注目されます。転用硯の存在は、文字を書くことができる人がいた事を示しますが、当時文字を読み書きできるのは、ごく一部の人々（役人など）に限られていました。またベルトのバックルは、当時の役人の正装に必要不可欠なもので、県内でも数点しか発見されていない大変貴重なものです。こうして考えると、役人がこの村に住んでいた可能性も指摘できるでしょう。乙金地区やその周辺では、官衙（当時の役所）は見つかっていないため、ひょっとしたら大宰府まで出勤していたのかもしれない。

これ以外に奈良時代の珍しい遺物としては、文字の刻まれた須恵器が発見されています（写真14）。漢字で「多来」と書かれ、当時の地名を示すものと考えられています。この須恵器は「たく」の地で作られ、運ばれてきたのでしょうか。

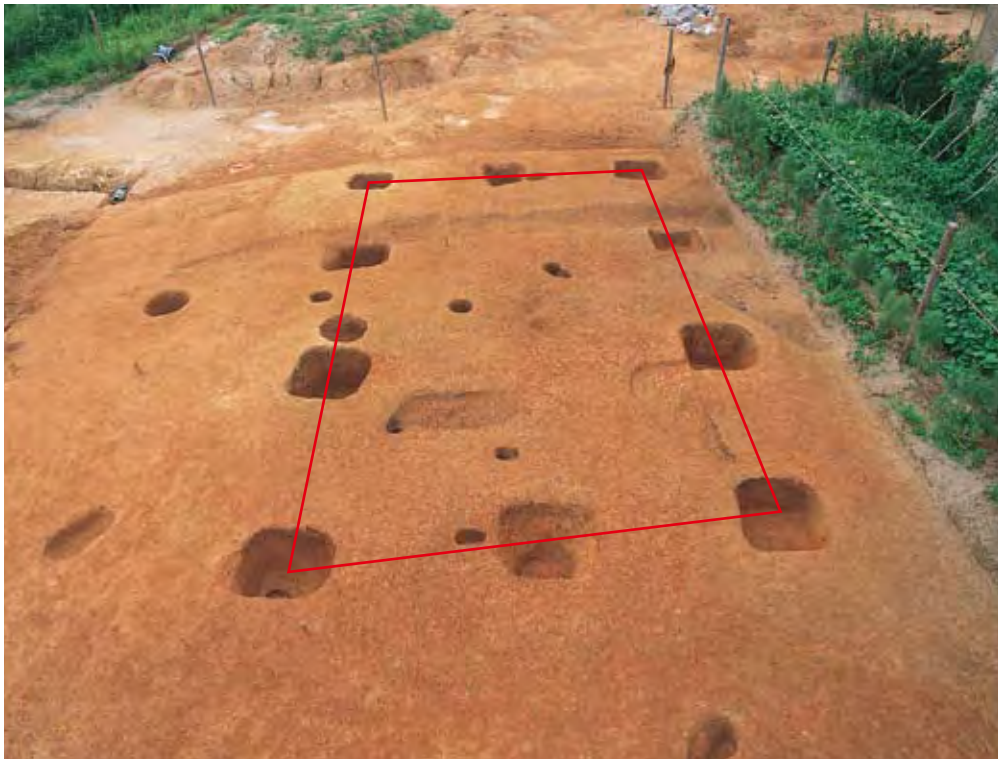


写真13 掘立柱建物の跡

続く平安時代にも、小規模な集落が営まれ、掘立柱建物やお墓（土坑墓）などが発見されています。見つかった建物の数や土器の量は決して多くはありませんが、貴重な遺物として「四王」と刻まれた瓦を紹介します（写真15）。この瓦はあまり例がないのですが、乙金地区以外では、四王寺山の毘沙門天近くなどで発見されています。四王寺山には、奈良時代に四天王（持国天・



增長天・広目天・毘沙門天) を祀った「四王院」が建てられていたことを考えると、「四王」瓦は四王院のために作られた可能性が高いといえるでしょう。ではなぜ、乙金地区で出土したのでしょうか。いろいろ想像することができますが、ひょっとしたら、当時の人々が四王院参りの記念品として、落ちていた瓦を持ち帰ったのかもしれない。

写真14 「多来」と書かれた須恵器



写真15 「四王」と刻まれた瓦

## 5. 鎌倉・室町時代—再び大開発の時代—

### i) 墓から見た中世の乙金

鎌倉に幕府が置かれ、武家社会が成立するころ、乙金では再び活発な人の営みを見ること



写真16 木棺墓から出土した青磁



写真17 青磁が発見された時の様子